

## 「政党政治」革正と新官僚

### 小 関 素 明

ばならなかつた矛盾を析出することを試みた。従来の論収、および今後予定している当該期陸軍の対外政策構想の分析とともに、筆者の「日本政党政治史論」の一環を構成するものである。

はじめに

- 一、新官僚の政治勢力化—国維会の成立—
- 二、国維会の「政党政治」改革構想
- 三、非「政党内閣」的連合政権とその問題点  
おわりに

### 論文要旨

本稿は一九二〇～三〇年代における新官僚の「政党政治」革正構想に着目することによって、日本の「政党政治」がいかなる矛盾を包蔵していたかということを明らかにするための試みである。

明治憲法体制下においては、原理的には「政党政治」以外の方法で諸権力の統合をはたすことは困難であったが、現実的には「政党政治」はさまざまなジレンマを内包していた。したがつて「政党政治」が成熟するにともなつていくつかの「政党政治」革正構想が政党の側からも官僚の側からも試みられることになった。筆者は、一九二〇年代中期以降に検討課題に上る地方分権・選挙制度革正・官吏の身分保障強化は、濃淡の差はあれ、いずれも「政党政治」革正構想と位置づけうると考へている。

こうした視角の下に、本稿では具体的には主として一九三〇年に結成された新官僚の結集団体「国維会」の地方分権・選挙制度改革・官吏の身分保障強化構想の狙いに注目することによって日本の「政党政治」が直面しなけれ